

# トウカイテイオーの添い寝大作戦

黄金モルモット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

虫が鳴って

息が漏れて

トレーナーは嘘つき

トウカイテイオーは小さな体に勇気を込めた

目次

トウカイテイオーの添い寝大作戦

## トウカイテイオーの添い寝大作戦

メジロマックイーンが友人とそのトレーナー達を誘って行われた強化合宿も最後の夜を迎えた。

広大な敷地の別荘には1人1人の部屋が用意されており、各部屋は厳重なセキュリティで守られている。夜間の部屋は絶対の安息地なのだ。

トウカイテイオーのトレーナーはイタリヤから取り寄せられた最高品質のベッドと、厳戒態勢のセキュリティによって深い眠りの底にいた。

その時、部屋の隅にある壁が静かに開いた。壁に似せて作られた隠し扉がそこにあつたのだ。

そして眠りの底に近づくはトウカイテイオー。

夏夜の風は静かで、草の匂いが強い。

——寝ているよね。起きて、いないよね。

いつもの軽やかさは何処へやら、冷や汗をかいて忍び足でベッドまで近づくとテイオー。

なぜテイオーがこんな事をしているのか、時計の針は最終夜の夕食後まで遡る。

蛍の見える庭園。小川にかけられた橋で、ぼんやりとその明かりを見つめるテイオーに近づくと影があつた。メジロ家の令嬢、マックイーンだ。

「こんな所にいたんですね。探しましたわよ」

「あ……マックイーン……」

「デザート、お召し上がりになりませんか？」

「うん……ちよつとね……」

「晚餐会の時から様子がおかしいと思っっていますが、私にその理由を話してくださいまし」

銀河の夜、星と蛍が照らす橋の上。テイオーは夢中でマックイーンにその胸中を語った。

トレーナーへの恋慕、焦り、嫉妬、怒り、涙、苦しみ、喜び、切なさ、憧れ、思い出、衝動。

滅茶苦茶に言葉を重ね続け、そして最後に一言「トレーナーの側にいたい」と言うのとテイオーは沈黙した。ここぞとばかりに虫の音が響き渡る。

そんなテイオーにマックイーンは耳打ちをした。長い歴史を持つ名家メジロ家ならではの秘密。屋敷に隠されたからくりを。

テイオーの瞬きと共に、時は戻った。

寝息をたてるトレーナーに、胸が張り裂けそうなほどの息苦しさを覚えた。声を抑え、心を抑えて深呼吸。そしてベッドに潜り込んだ。

少し大きめのベッドはトレーナーと小柄なウマ娘が寝るには充分な広さとなる。

もどかしさと切なさに気が狂いそうになり、寝ているだけなのに息が切れる。吐き気もする。

勇気に心震わせ、怯えに肩を震わせ、その両方に震える声を必死に必死に絞り出す。

テイオーの声は暖かく、そしてぬるい。

「トレーナー。多分寝ているだろうから、これはボクワガママな独り言だけどね。」

「ボクね、トレーナーに凄く感謝しているんだよ。理由は沢山あるから全部は言えないけどね。」

「何回も怪我しちゃって、何回もトレーナーの期待を裏切って、それでもトレーナーはボクの事を諦めないでくれたよね。」

「ボクの無茶なお願いにも、意地悪な質問にも笑わないで付き合ってくれたよね。」

「本当に、ありがとう。」

「それでね、またお願いなんだけどね。これからもボクの側にいてほしいな。こうやって一緒のお布団で寝て、一緒にご飯を食べて、それから、えつと……これは……言うのが恥ずかしいかも。」

「て、寝ているから聞こえていないよね。」

——じゃ、じゃあボクは自分の部屋に戻るね。

——お休み、トレーナー。

そうベッドから降りた手を掴まれた時テイオーがどれ程驚いたかは、計り知る事が出来ない。

その手は紛れもなくトレーナーの手だった。

「ずっと、側にいたいんじゃないのか？」

暗闇の中で目と目が合った。叫びだそうと開かれた口をもう片方の手が塞ぐ。トレーナーの両手に誘われるようにテイオーは再びベッドの中へ。

「明日、マックイーンにお礼を言わないとね」

「あ、わ、わ、と、と、トレーナー!？」

「シート……皆起きちやうから……」

もはやテイオーに拒否権は無く、トレーナーはそのまま眠ってしまった。テイオーがその後一睡も出来なかったのは言うまでもない。

朝を迎え、マックイーンが2人を迎えに行くまでこの添い寝は続いたのであった。その次の晩も、さらにその次の晩も、同じように。

遠くどこかで1度だけ、虫が鳴いた。